



目指した研究を中心にして講演され聴衆に感銘を与えた。pillard clay は層状粘土鉱物の層間を Al カチオン等により架橋し、固体酸としての新たな反応場を提供するもので、日本国内でも数研究室によりその調製および有機合成反応への応用が精力的に進められている物質である。

日本側からの発表は、C1 化学組合の総括、NEDOL プロセス中の特に donor solvent の再水素化の問題点、あるいは触媒再生の問題、のように極めて実用問題に近いものから、金属の微粒子化、分散、および SMSI に関する問題、層状化合物、ニオブ酸、金属カーバイド等のような新しいタイプの触媒に関するもの、固体 NMR、EXAFS、メスbauer 一等の分光学的手法による触媒の部分構造解析、あるいは複合酸化物の合成とキャラクターゼーションならびに酸化反応、触媒燃焼にかかわる研究まで極めて多岐に亘るものであった。日本の触媒研究のレベルの高さを示すものと思われる。

米側発表の中ではゼオライトの合成・生成過程を NMR で追跡したもの、金属触媒の分散およびアンサンプル、反応中の金属触媒の構造変化等の問題に興味をひかれたが、筆者の勉強不足のためであろうが、研究のポイントと実証の点で今一つ物足りなく感ぜられた。米側参加者の討論参加に対する積極的姿勢にはいつも感心させられる。

中国側からは 20 を越える都市から 100 名近い参加者があり、移動距離と経済事情を考慮するとシンポジウムにける意気込みがうかがえる。参加者は大学所属の他、科学院関係の研究機関、および石油部・化工部関係の工場・研究所若干からであった。参加者の中には高滋教授(復旦大学)をはじめ女性の姿が多いことが目につき、さすがお国柄と思わせた。中国側からの発表にはゼオライト関係、アルコール合成、および酸化反応に関する研究の多さが目についた。既存物質の触媒作用に関する整理・理解が主流をなしている一方で、新物質の開発研究に問題が残る印象があった。表面分析・表面科学関係では酸化物の Auger, XPS の分析が多く、また Raman 分光も目についた。この方面の基礎研究の着実な進展が認められるが、その一方で独自の研究方向という点では物足りなさを感じた。

シンポジウムの proceedings は日米の講演は各 1 ペー

ジ、中国側はポスターセッションを含め各 2 ページより構成され 150 ページを越えるものとなった。中国側からの参加者から日米のアブストラクトが 1 ページでは短か過ぎてわかりにくいとの声も聞かれた。

会議の進行は一般に主催者側のアレンジ、座長の司会方法、および発表者の慣れに依存するが今回のシンポジウムにおいても予定時間を大幅に超過し、いつ終るかと思われ、座長をヤキモキさせ、また聴衆をあきれさせたケースもあり、夜 8 時から急遽セッションを増やし、終了時刻を 10 時としてスケジュールを消化した日もあった。

8 月の廈門は期待どりの暑さであった。幸いなことにホテル(金寶酒店)、会場とも空調がきいており、両者をつなぐバスも同様であったので、シンポジウムに参加している限りはなんら問題はない。中国側の努力に感謝する次第である。

明代に建設され、現在人口約 55 万人の廈門は 1980 年に経済特区入りし、1984 年には周辺を含めることにより範囲が拡大され現在に至っている。旧市街(含廈門港)の北部に外国資本の参加も得て次々と生産区が建設され、工業、商業、旅行業を中心とした経済発展が進行しつつある。1983 年 10 月に空港が開かれてからは、香港、マニラ、シンガポールおよび国内諸都市間と空路による移動が可能となった。

ハードなスケジュールを縫って、廈門港対岸に鷺江を挟んで横たわる鼓浪嶼、一華僑の出資により 1913 年から建設された集美学村、廈門大学、南普陀寺の見学、鷺江賓館における dinner party、廈門大学ゲストハウスにおける farewell party がアレンジされたが、シンポジウムをはじめ、これらのスケジュールを全体としてとどろりなく進行させた陳祖炳、林国棟、張鴻斌の三先生をはじめ廈門大学を中心とする現地のメンバーのご苦勞は暑い折りでもあり精神的・肉体的に重労働であったと推察する。

次回第 4 回日中米シンポジウムの開催地は、日本、米国の正副団長と、中国側の郭雙賢(大連化学物理研)、蔡啓瑞(廈門大学)、閔恩澤の三氏とから構成される steering committee により、札幌で開催することが希望され、その後の日本国内での検討により 1989 年 7 月の開催が内定した。